

# 知人の存在と文化的自己観が認知的不協和に及ぼす影響

○斎藤将大・上淵寿

(東京学芸大学大学院教育学研究科・東京学芸大学)

キーワード：文化的自己観，認知的不協和，知人

The effects of acquaintance's existence and cultural view of self on cognitive dissonance

Masahiro SAITOU・Hisashi UEBUCHI

(Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University・Tokyo Gakugei University)

Key Words: cultural view of self, cognitive dissonance, acquaintance

## 目 的

北山(1994)は、「ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提」を文化的自己観と定義した。

文化的自己観における研究の一つとして、認知的不協和の生起との関連が挙げられている(今田・北山, 2005; 北山他, 2004)。例えば、「相互独立的自己観」においては、他者の影響が想定されず、個人の意思決定能力だけが問題になる状況下で、態度変化が生じるとされている。これに対し、「相互協調的自己観」においては、他者からの評価が想定される状況下で、態度変化が生じるとされている。

また、竹村・有本(2008)は、自由選択パラダイムにおける実験で、相互独立的自己観が高い参加者に対して行った場合においても、同一グループ内に知人がいた場合の影響を示唆している。

同一グループ内に知人がいることによる認知的不協和場面における影響は、相互独立的自己観と相互協調的自己観では異なると推察される。

そのため、本研究では、相互協調的自己観・相互独立的自己観それぞれの高低によって、グループ内における知人の有無が認知的不協和場面に与える影響について検討することを目的とする。

## 方 法

対象：大学生 48 名(男性 32 名，女性 16 名)

材料：CD10 枚，質問紙，ついたて，ペン，ノートパソコン  
質問紙の構成：

- ①フェイスシート：年齢・性別・所属学科を尋ねた。
- ②文化的自己観尺度(20 項目)：高田(2000)を用いた。

相互協調的自己観を測定する 10 項目(評価懸念 4 項目，他者への親和・順応 6 項目)，相互独立的自己観を測定する項目 10 項目(この認識・主張 4 項目，独断性 6 項目)から構成される。

### ③CD に対する評価

(I) CD を欲しいと思う順位(1~10 位)

(II) それぞれの CD に対する欲しいと思う魅力

手続き：実験参加者を，知人である 2 人組の群(以下知人群)と他人同士の 2 人組の群(以下他人群)に分別した。

実験当日には，参加者間にはついたてが置かれ，相手の回答が見えない環境を設定した。まず，文化的自己観尺度を回答させた。その後，10 種類の CD を提示し，CD に対する評価を記入させた。評価後，参加者に対して，実験の最後に自己観に関する議論をしてもらうことを教示し，他者の存在を意図させた。

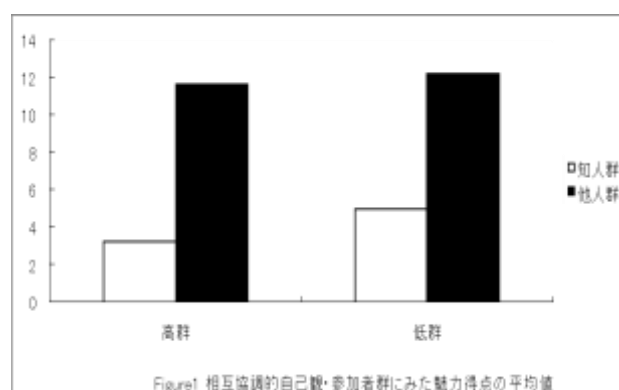
教示後，参加者が 5 位と 6 位に評価した CD を提示し，欲しいと思う CD を 1 枚選択させた。その後，再び 10 枚の CD を提示し，CD に対する評価を記入させた。

## 結 果

2 枚の内から選択された CD の順位の上昇値と選択されなかった CD の順位の上昇値の合計を順位上の得点とし，2 枚の内から選択された CD の魅力の上昇値と選択されなかった CD の魅力の上昇値の合計を魅力上の得点とした。

また，文化的自己観を相互協調的自己観・相互独立的自己観・それぞれの下位尺度ごとに得点化し，平均値で高群と低群に分類した。

参加者群(知人群・他人群)×文化的自己観(高・低)の 2 要因分散分析を行った。相互協調的自己観において，魅力得点を従属変数とした際に，参加者群間に主効果が見られた ( $F(1, 44) = 13.42, p < .001$ ) (Figure1)。また，相互独立的自己観において，魅力得点を従属変数とした際に，参加者群間に主効果がみられた ( $F(1, 44) = 16.11, p < .001$ )。また，文化的自己観による違いは見られなかった。



## 考 察

以上の結果から，文化的自己観の違いによる態度変化の違いは示されなかったが，認知的不協和場面での周囲の人間との関係性によって態度変化に違いが生じることが示された。先行研究では，相互独立的自己観の高者は認知的不協和による態度変化において，他者との関係性や状況による影響を受けないとされていたが，今回の結果とは一致していない。

これは，従来の研究では，存在する他者は赤の他人や親しくない関係であり，知人を対象とした研究が十分に行なわれていなかったことが関係していると考えられる。

よって今後は，知人同士の場面における認知的不協和場面に関する研究を進めていく必要があると考えられる。

## 引用文献

北山忍 (1994). 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.

竹村幸祐・有本裕美 (2008). 「北の大地」における相互独立的自己：北海道での認知的不協和実験 実験社会心理学研究, 48, 40-49.